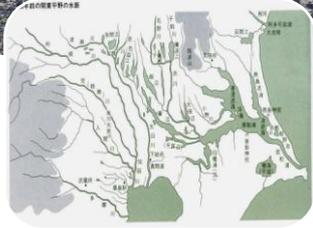


← 東京スカイツリーから見た筑波山。眼下には沃野一望の関東平野がどこまでも広がっています。(『BLUE STYLE COM』HPの「東京スカイツリー定点観測所」より転載)



→ 海進により霞ヶ浦、牛久沼、印旛沼等が内海を形成している1000年前の関東平野(『農業土木歴史研究会』HPより転載)

## 校歌に謳われた「沃野」

1911(明治44)年に制定され、当時の土浦中学校から現在の土浦一高に至るまで、100年余にわたって歌い続けられてきた本校校歌。そこに登場する「沃野」とは、地味がよく肥えた平野、すなわち高い生産力(経済力)をもった広大な土地(平野)を意味しています。そこで、今号から少しの間、土地の生産力に着目し、このことについて歴史的視点から考察してみます。

## 地球温暖化

「地球温暖化」という言葉は、近年、大気中の二酸化炭素の増加による温室効果の問題視され、よく使われるようになりました。まずは、このことを地球の歴史の中で捉えることからいってみましょう。

137億年前のビッグバンの後、宇宙が形成されることになり、地球は、45〜46億年前に誕生したと言われます。その後、生命が誕生し、6千500万年前からの新生代になると、霊長類が登場し、370万年前には最古の人類のアウストラロピテクス(猿人)が生まれ、今日に至っています。その間の地球は、温暖化・寒冷化が繰り返され、時には数万年間も寒冷期が続く氷河期もありました。氷河期には、北米大陸・ヨーロッパを中心に北半球の多くの地域が雪と氷に覆われました。我が国には、はっきりとした氷河期の名残は少ないものの、北アルプスにあるU字谷は氷河のあった証左なのです。そして最後の氷河期が1万2千年前に終わり、その後、地球の温暖化が急速に進行します。

(実は氷河期と氷河期の間は比較的温暖な時期が数万年以上も続く間氷期と呼ばれる時期があり、現在はそこにあるといわれています。もちろん氷河期でも間氷期でも、その中で寒冷・温暖が繰り返されています。)

氷河期が終わると、我が国では縄文期に入り、人々の活動がとも活発になる時代に入ります。気候の温暖化に伴い、植物の成長が飛躍的に促進されることにより、自然界の動植物を食料とした縄文人の行動が非常に旺盛になるのは当然のことでした。その一方で、海進(温暖

化により大地を覆っていた氷雪が溶けることで海面が上昇し、内陸部まで海水が進入する現象)が進みました。茨城県でいえば、県南から県西にかけて、現在の霞ヶ浦・利根川水系の多くで海進が認められ、筑波山麓周辺まで海水が広がったのは間違いありません。縄文期に形成された貝塚がその証拠で、この貝殻は、ほとんどが汽水域(海水と淡水が混在する状態の区域)のものであり、各地に残る貝層(自然に貝が堆積したもの)でも、牡蠣をはじめとして海水に生息するものが数多く確認されています。(今でもかすみがうら市の霞ヶ浦湖岸には、牡蠣の貝層がみられます)



高橋史郎(上)『縄文時代の生活』より転載  
高橋史郎(右)『石岡市史』より転載  
高橋史郎(左)『石岡市史』より転載  
高橋史郎(中)『石岡市史』より転載

## ムラからクニへ

縄文人は、温暖化によって豊富になった動植物や魚・貝を食料とし、台地の縁辺に10戸程度の集団であるムラを形成して生活しました。

1万年も続いた縄文時代の末期には、大陸方面から稲作を伴う文化が伝わり、農耕生活が主となる社会が急速に形成さ

れていきます。いわゆる弥生時代の到来です。従来、弥生時代のスタートは紀元前3世紀で、北九州に始まり、100年ほどを要して東北地方北部にまで到達したとされていますが、今日では、紀元前5〜6世紀が始まりで、急速に東北北部まで展開されていったとされています。

農耕生活が始まることにより、人々の生活は大きく変化し、1万年続いた縄文時代とは異なり、弥生時代は数100年で新たな社会へと変質していくことになりました。その最も大きな要因は、旧来に比べて生産高や蓄積が桁違いに増大したことと、農耕社会での指導者の必要性でした。つまり人々は、より多くの生産を求め、灌漑の敷設や耕作適地の拡大に努める必要から、社会集団を大規模化させる一方で、集団をまとめられる指導者を出現させていくのです。それは、集団をムラからクニへと変化させることにほかなりません。勿論、当時の日本民族は文字を持たなかったため、それが文字資料として残るものは全く存在しませんが、明治以降、特に戦後の発掘調査をもとにした研究から解明されたところです。

3世紀になると、ムラからクニへの統合が進み、やがてヤマト政権による国土の統一(北九州から近畿方面)がなされます。いわゆる古墳時代の到来です。ヤマト政権は国土の支配体系を整え、より強固な支配体制を確立していきます。6〜7世紀がこれにあたる時期であり、政治的な中心地「飛鳥」から飛鳥時代とも言われ、やがて、奈良時代の律令制度による政治体制へと繋がることになりました。この間も、農具の改良などによって、生産向上の努力は続けられました。

## 生産力と人口

古来、一定の地域における人口は生産力に比例していると、よく言われることです。

奈良時代の人口が500万人と言われ、近世初期が1千200万人程度で、明治維新の頃でも3千万人程度。それが現在では、人口減少期に入ったとされながらも、1億2千800万人。現代の人口は当然ながら国内のみの生産力ではまかなうことはできませんので、対外貿易に頼ることが必定であることは承知の通りです。平成22年時点の食糧自給率はカロリーベースで僅か39%しかありません。このことからすれば、国内生産のみで養える人口は5千万人弱と言えるでしょう。

さて、江戸時代から明治期の人口統計はある程度信頼できるものの、奈良時代の「500万人」については、どの程度まで信用できるものなのでしょうか。この点について、常磐自動車道の工事に関連して常陸国衙関係の「鹿の子遺跡」の発掘調査が昭和59年から行われ、その際に貴重な資料が得られました。奈良時代後期から平安時代前期にかけて蝦夷征討などの軍事活動に関連した遺構・遺物の発見がそれで、その中に漆紙文書があり、大いに注目を浴びました。漆紙文書とは、国庁などで用いられた帳簿類の文書が漆容器の蓋紙などに再利用されたもので、漆が付着したため腐食せずに今日でも読むことができます。漆紙そのものから直接文字等を判読することはほとんど不可能ですが、赤外線カメラやエックス線カメラなどを用いて解読が可能なのです。

鹿の子遺跡の漆紙文書の中には、計帳や調帳などの租税に係るものがあり、奈良時代末期の常陸国の人口が約22万人と推定され、これをもとに当時の日本の人口を考えると、500万人と言われていた数字が、現実よりかけ離れた数字ではないことが確認されました。

字が、現実よりかけ離れた数字ではないことが確認されました。



奈良時代の日本の人口を約500万と推定できた『鹿の子遺跡出土漆紙文書』（『石岡市』HPの「鹿の子遺跡出土漆紙文書一括」より転載）

## 生産力の向上

平安・鎌倉・南北朝・室町・戦国と時代は変遷しても、人々の生産向上のための努力は嘗々と重ねられ、この間に特筆すべきことは鉄製農具の普及や肥料の使用です。中でも、刈敷といわれる草を刈り込んですき込む緑肥や草木灰を肥料とする方法がとり入れられると、単位面積当たりの生産が大幅に高まりました。さらには人糞尿も肥料として活用されると、近畿以西では二毛作や三毛作も行われるようになっていきます。

また、中世（平安末期〜戦国時代）は、武士が社会の中心になり、戦乱もしばしば起こり、住みにくい社会ではなかったのかと思われがちですが、意外なことに、支配者の生産奨励もあり、活気ある人々の活動は目を見張るものがあつたのです。それは当然、生産力の向上にも直結していきます。ただ、中世は、古代からの荘園制度が依然として残っていて、土地の一元支配には程遠い状況でありました。そればかりでなく、後半になると、群雄割拠で支配者が多数存在したため、

日本全体の人口や生産力をつかみにくい時代でもあつたのは間違いありません。やがて戦国末期を迎えると、全国統一や一元支配に向けた動きが本格化してきます。織田信長は支配地域において「指出検地」を実施し、一元的な支配をめざしました。これを受け継いだ豊臣秀吉は、俗に言うところの「太閤検地」を実施し、全国を一元的に支配する体制を築くのです。しかし、豊臣政権は長続きせず、その基本的しくみは徳川家康による江戸幕府に引き継がれることになりました。

## 貫高制から石高制

ところで、中世末に群雄割拠した戦国大名は、支配地の経済的基盤を正確に把握するために検地を行うとともに、土地の生産性などの表示としては貫高制を採用しました。貫高とは、田地の面積を、そこから収穫することのできる平均の米の量を通貨に換算し、「貫」（1000文）を単位として表した数値をいい、それを税収の基準にする土地制度を貫高制と呼びました。従って、同じ貫数でも土地の条件などによって実際の土地面積は異なることとなります。貫高制とは、米で納めるべき年貢を銭で代納する「分銭」に由来し、この制度のもとでは、武家の知行高も貫で表し、貫高に基づいて負担する軍役も定められました。貫高制の典型的なケースとして、後に小田原を中心に南関東一帯を支配した後北条氏の例があります。後北条氏は、田には1段当たり500文、畑は同じく150〜200文を標準とし、永楽銭（中国・明から輸入した銅銭）あるいは代納として米で納めさせ、代納の場合は100文を米1斗2〜4升に換算しました。なお、永楽銭で納付させた貫高制を特に

永高ともいい、戦国時代になると、自給体制の崩壊とともに支配階層の貨幣に対する需要が高まったことから、永高が普及したものとも言えます。その一方で、戦国大名の貫高制は、国人領主層や在地小領主層を知行制により家臣団として編成するとともに、年貢集取在地支配を行うシステムであると位置づけられています。十分掌握がなされたとする説と不掌握であったとする二説に分かれています。

そして、貫高制から石高制に移行する時期がやってきます。当時の日本は貨幣を自給できなかったことや鏝銭（びたせん：私鑄銭などの質の低い貨幣。「びたせん」の表現。1文は最低の通貨単位）の問題もあり、貫高制の維持に見合う貨幣流通量が確保できなくなつたからです。戦国時代後期には、商業の発展や生産量の増加に伴い、銭に代わって銀や米が価値の基本になり、貫高制は混乱し、米などの代納が多くなりました。そうした状況を踏まえ、秀吉の太閤検地では、土地を測定して面積を出し、標準収穫量を算出する石高制を原則に採用しました。これを機に石高制に移っていきます。（次号に続く）

（高21回卒 鈴木義人）



鎌倉期から戦国期にかけて現在の土浦地域を支配した小田氏の居城「小田城」址（右上）。貫高制を支えた「永楽通宝」（左上）とその鏝銭（左下）（貨幣は、しらかわただひこ『コインの散歩道』HPより転載）